

山の上の特養から 住み慣れた地域へ

新潟県長岡市「こぶし園」小山剛さんの挑戦

一昨年(平成26年)3月、山の中の特別養護老人ホーム(定員100人)を地域へ戻すという大仕事を成し遂げた小山剛さん。60歳という若さで、昨年3月にがんのため逝去されました。

「なじみの町で暮らし続ける」ための、その取り組みは、介護保険の礎となってきました。

取材：文：倉西隆男(医療ライター、社会福祉士)

「こんなところにごめん」に
込められた思い

1982(昭和57)年、コブシの花が美しい雪解けの頃、特別養護老人ホーム「こぶし園」がつくられました。市街地から車で20分の山の上。定員100人という大規模な施設に相談員として配属された若者が小山剛さんでした。小山さんは仙台の大学で福祉を学び、障害がある

子どもにかかわる仕事をするため故郷に戻り、児童指導員を経てこぶし園に配属されたのでした。

当時はまだ舅や姑の世話をするのは嫁の役割。しかし、女性の社会進出や核家族化などの波を受けてその慣習が大きく揺らいでいました。真新しい建物を前にして若者は、「ここ(特養)に入れば家族は楽になり、きっと本人も喜んでくれるに違いない」と考えました。しかし、

じきにそれは間違いだと気づくのです。「こんなところに入れてごめんね」。こぶし園にお年寄りを連れてくる家族の言葉が深く胸に突き刺さりました。

「これからこんなところで働くのかと思っただけです。どんなに立派な建物を建てても、本人は決して入りたいと思っはいない。家族も泣きながら帰っていく。それぞれが生きてきた地域や家へ帰してあげよう。できれば、施設に入らなくて済むようにしよう」

これが、小山さんの挑戦の原点となりました。その思いは、特養スタッフも共有するものとなり、法人理事長の理解と後押しを得ることになります。

1963(昭和38)年に制定された老人福祉法に沿えば、当時の特養は高齢者を収容して介護を提供する場所でした。家で介護が難しくなった家族に代わり、国がそれを保障しようという理念でした。現在は老人福祉法から削除されたこの「収容」という言葉に小山さんはこだわっていました。収容とは一時的なもの。だからいつかは家に帰さなくてはな

らない、と。一昨年、私が長岡を訪ねた際、小山さんは語気を強めて言いました。「当時は、土地が安い郊外に建設された施設に高齢者が集められました。それぞれの家族ががんばって自宅に連れて帰るといのが法の主旨でしたが、実際はそんなことできません。言葉はよくないが、特養は一度入ると出られないところだったんですよ」

なじみの町に
住み続けるための仕組み

施設で提供しているサービスをそっくりそのまま地域で提供することができれば、特養入所者を出身の地域に戻すことができる小山さんたちは考えました。そこで、こぶし園の事業として、長岡市市街地での、訪問介護サービスを365日、24時間利用できる仕組みを1995



こやまつよし◎東北福祉大学卒業後、郷里の知的障害児施設や重症心身障害児施設の児童相談員、社会福祉法人長岡福祉協会高齢者総合ケアセンターこぶし園の主任生活指導員を経て、2000年に同センター総合施設長に就任。同法人理事、評議員、執行役員なども勤める。ビートルズが好きで、ギターを弾きケアを語ることもあった。

[表1] こぶし園による「高齢者を地域で支える仕組みづくり」

1986年	在宅ケアのベース・ショートステイを整備(97年に80床に)
1986年	訪問介護サービスの導入(95年には24時間365日のフルタイムに)
1992年	通所介護を開設(早朝夜間にも対応、365日)
1996年	モデル事業で認知症対応型グループホームを導入
1997年	3食365日の食事サービス、24時間365日訪問看護を開始
2000年	介護保険制度の開始
2002年	サポートセンターを創設し、地域単位のニーズに対応
2003年	国の支援で「テレビ電話による在宅版ナースコール」開発
2004年	サポートセンター構想が特区申請で採択される(特別養護老人ホームで暮らす高齢者を地域に戻す施設として、15~30人のサテライト型特養に小規模多機能事業を併設。24時間365日、地域に合わせた切れ目のない介護サービスを提供)

年に、その2年後には訪問看護ステーションを立ち上げました。いずれも介護保険制度がスタートとする前でした「表1」。こうした事業は、次々と介護保険の中で制度化され、2006年の介護保険法改正で、国はようやく、介護も医療も看護も見守りも、丸ごと面倒みましょう

という「地域包括ケア」を具体的に示しました。国がお手本にした小山さんの挑戦は、そのまま地域ケアの歴史といっても過言ではありません。

「利用者や地域社会のニーズがあれば、非効率であっても、モデルの制度設計にチャレンジすることが、社会福祉法人にしかできない大切な役割だと思っております」

小型の「サテライト型特養」で分散

市街地に在宅生活を支える仕組み（サポートセンター）を整え、小山さんは山の上の特養から利用者を地域に戻すチャレンジをいよいよ開始します。

国と協議の上、04年、民間資源を活用して、従来型の大型特養の入居者を地域に戻す仕組みを長岡市に提案し、構造改革特別区（特区）として許可されました。それが、サテライト（地域分散）施設です。山の中の特養に入居していた100人のうち70人が、06年～12年に市内4カ所の小規模特養に移りました（左ページ図1）。この取り組みは、06年の介護保険改正時に地域密着型サービスとして取り込まれました。

リノリウムの床にベッドが4つ並ぶといったそれまでの環境は、温かみのある木材が使われたおしゃれなつくりの個室になりました。日当たりのいいテラスから外へ出られる部屋もつくりました。定員15～30人の小さな特養には、グループ

ホームや小規模多機能型居宅介護事業所（通いを中心に訪問・泊まりのサービスを提供）に、コミュニティスペースやカフェテラスを併設して、家族、地域の人気が気軽に立ち寄り、子どもたちが遊びに来ることができるよう、地域住民のための場所に生まれ変わりました。14年3月1日、最後の30人が地域に戻りました。



地域に溶け込むサテライト型特養。特養のほか、グループホームまたは小規模多機能型居宅介護事業所、コミュニティスペースなど多目的な施設。サポートセンターとして、地域の介護ニーズに応えている。

小山さんは、100人が入居していたこぶし園の、何もないがらんとしたフロアに立って遠くを見つめ、嘔み締めるように言葉を残しました。

「30年あまりかかったけれど、〝収容所〟を解体できた。長かったなあ」

地域全体を施設、病院に。「長岡モデル」をつくる

全国から注目された小山さんの取り組みを、こぶし園の総合施設長を引き継いだ吉井靖子さんはこう振り返ります。

「地域の方々、ご利用者、ご家族が何を望んでいるのかを考え、介護保険とは関係がないことでも実践していく。特養の分散はまさにそのひとつです。

彼は介護保険の精神（本人が望む生活を保障する）を目に見える形で示したのだと思います。私たちには、さらに24時間365日の連続するサービスをもっと身近な生活圏域に広げていく使命があります。たとえば『定期巡回・随時対応型訪問看護介護（平成24年創設の定額制サービス。定期的訪問に加え、24時間必要が

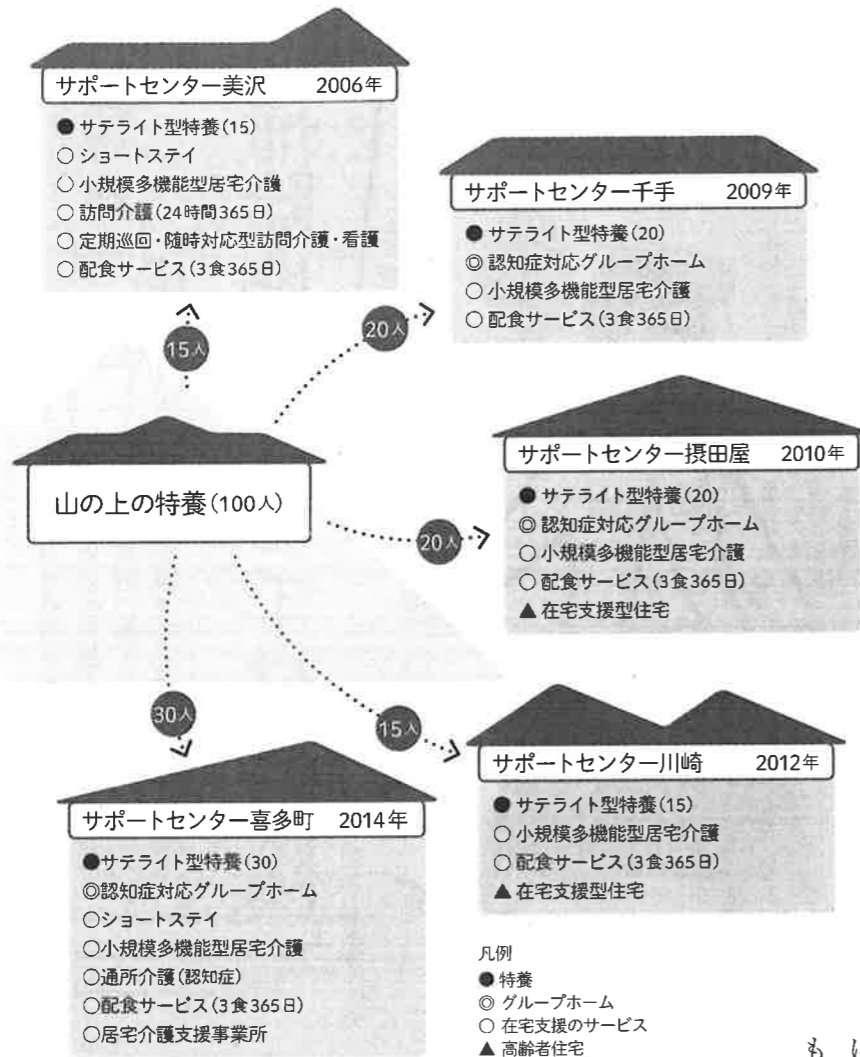
あればいつでも訪問』を増やすことで、施設に入らなくても地域で暮らしているのです」

地域全体をひとつの施設や病院にというのが合言葉。医師会などと協力し、長

岡モデル」をつくらうとしています。「地域の力を育て、その力を高めることも大事な役割。町全体をつくっていくことも地域包括ケアだと思っんです」（吉井さん）

生前、介護保険が家族ではなく本人のためのものであることを繰り返し述べていたのも小山さんです。介護保険制度の創設により、家族の介護にかかる負担は減りましたが、本人のために必要なサービスになつてきているのか。介護の質の向上につながっているのか。小山さんは、今もそう問いかけていると思います。

【図1】特養の地域分散と、地域全体を支えるシステム



思いを引き継ぐ吉井靖子総合施設長



地域の人も集う、センター内の共用スペース。